

# 中学生のジェンダー観の形成要因

多々納道子\*、若築純子\*\*

(\*島根大学教育学部家政教育研究室、\*\*島根県立松江農林高等学校)

Factors Affecting the Formation Gender Roles of Junior High School Students

Michiko TATANO & Junko WAKATUKI

島根大学生涯学習教育研究センター

平成15年11月

# 中学生のジェンダー観の形成要因

多々納道子\*、若築純子\*\*

(\*島根大学教育学部家政教育研究室、\*\*島根県立松江農林高等学校)

Factors Affecting the Formation Gender Roles of Junior High School Students

Michiko TATANO & Junko WAKATUKI

## Abstract

The purpose of this study is to evaluate the factors affecting the formation gender roles of junior high school students. The results are as follows :

Compared with male students, female students tend to be gender free in the concept and behavior. Both of them, the factors affecting the formation gender roles are revealed the guidance of their teachers by using quantification I . Especially in the case of the female students, factors were affected from their mothers. Therefore the teachers have to have workshop changing the gender roles.

## I. 緒言

1975年の国際婦人年を契機に、男女平等を推進する国際的な取り組みが積極的に展開されることになった。この時に策定された世界行動計画は、それまでの伝統的な考え方から脱して、家庭や社会において男女がともに性を超えて、個人の能力や才能を自分自身と社会のために発達させる権利・機会・責任をもつことを達成目標とした<sup>1)</sup>。このような目標を達成するには、伝統的に割り当てられてきた役割や機能の再検討が必要不可欠であり、主に教育を通じて、社会通念を変革するためのあらゆる努力が払われるべきであるという原則が示された。日本においても世界行動計画をふまえた国内行動計画を策定(1977年)し、積極的な取り組みが展開されることになった。

このように男女平等を推進する世界的な動向の中で、注目されてきたのがジェンダーである。ジェンダーとは、文化的、社会的に形成された性差を意味している<sup>2)</sup>。男女間の生物学的な差異をセックス (sex) とし、ジェンダー (gender) と区別してとらえると、ジェンダーによる固定的な取り扱い、個人の能力の発達や生き方を阻む要因となり、ジェンダーは男女平等を阻害することが明確になってきた。マイラ&デイヴィッド・サドガーが『「女の子」は学校でつくられる』と題する著書の中で問題提起したように<sup>3)</sup>、子どものジェンダー形成には、社会化の担い手である学校、家庭や社会などの教育環境が大きく関わってくる。したがって、男女平等の達成には性別にこだわらず、とらわれずに行動するジェンダー・フリーが鍵になる概念であり、教育においていかにジェンダー・フリーを達成するかが重要な課題となってきた。

生涯教育審議会は1992年に「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」と題する答申を出した<sup>4)</sup>。その中で、男女共同参画は社会の急激な変化に対応し、人間性豊かな生活を営むために重要な現代的課題であり、生涯学習の課題であるとした。その後、1998年及び1999

年に改訂された小・中・高等学校の学習指導要領で、特に家庭科は「男女共同参画社会の推進」を図る教科として期待され、内容の充実を図ることが提案された<sup>5)</sup>。これらのことを考え合わせると、ジェンダー・フリーを達成し、男女共同参画を推進することは、学校段階のみならず家庭生活に関わる教育、すなわち生涯教育としての家政教育における重要な課題といえる。

そこで、性差が顕著になり、自己に対する確認や存在証明を表すアイデンティティーの確立期である中学生はジェンダー観をどのように形成していくのか、男女によって形成のメカニズムが異なるのかを明らかにすることは、生涯教育としてジェンダー・フリーの考え方に基づく家政教育を実践していく上で大変重要である。これまで中学校教員のジェンダー観の形成要因について調査し、男性教員は研修のような教育的要因が、女性教員では個人・家族的要因の影響が大きいことが理解できた<sup>6)</sup>。これに続き、中学生を対象にし、アンケート調査からジェンダー観がどのような要因によって形成されるのかを明らかにすることを目的とした。

## II. 調査

1. 調査対象は、島根県内の中学校6校の3年生男子356人、女子308人であった。回収は100.0%であったが、無効回答が6人あったため、有効回収率は99.1%となった。したがって、男子352人、女子306人の計658人を分析の対象とした。
2. 調査方法は、質問紙法により技術・家庭科の時間に家庭科担当教員の下で、アンケート調査を行った。
3. 調査時期は、2000年10月上旬～11月上旬であった。
4. 調査内容は、きょうだいの構成、祖父母との同居状況、母親の就労状況、男女の特性、性別役割分業意識、ジェンダー観、家庭の仕事の実践状況、両親にみる家庭の仕事の実践状況、家庭でのしつけや学校での教育などであった。また、これらの調査内容に示される要因が相互に作用して、中学生のジェンダー観が形成されると捉えた。

## III. 結果と考察

### 1. 調査対象者の概要

調査対象者の家族の特徴をきょうだいの構成、祖父母との同居状況及び母親の就労状況によって明らかにしたが、図表による表示は省略した。

#### (1) きょうだいの構成

ジェンダー観は、男女の相互作用によって形成されるので、きょうだいの構成が同性なのか、男女混合かによって、性役割行動や考え方に自ずと違いがみられるものと考えられる。そこで、きょうだいの性別による構成比を明らかにした。

きょうだい数が複数の場合には、男女混合の構成が男子56.5%、女子63.4%と過半数を占めた。同性のみのきょうだいは、男子37.8%、女子33.0%であり、一人っ子は男子5.1%に対し、女子3.6%と男子の方が若干多かった。男女間に有意差はなかったが、これら性別による構成比の傾向は家の後継ぎとして男子を位置付けるという、家制度下の考え方がかなり残っていることを伺

わせるものと考えられる。

### (2) 祖父母との同居状況

男女とも祖父母と「現在同居している」ものが65.7%と最も多く、次いで「同居したことがない」の22.8%であった。今は同居していないが、「以前同居していた」は10.5%にとどまり、大部分のものはこれまで祖父母と関わりのもてる環境にあったといえる。

### (3) 母親の就労状況

子どもからみた母親の就労状況は、82.3%のものが働いており、無職というものは12.2%に過ぎなかった。就労しているものの内訳は、フルタイムが59.4%、パートタイム14.7%、自営業8.2%であった。全国的な傾向<sup>7)</sup>と比較すると、就労している母親が極めて多いという実態にあることが明らかになった。

## 2. 中学生のジェンダー

### (1) 男女の特性

中学生からみた男女の特性の捉え方の特徴を明らかにするため、東京女性財団による調査項目<sup>8)</sup>を参考にして8つの特性を取り上げた。

表1に示すように、「体や心の痛みをがまんする」を除いて、「男女同じ」と答えたものが最も多く過半数を占めた。特に「何事にも挑戦する気持ち」では、「男女同じ」というものが男子69.6%、女子85.0%が、「筋道を立てて考える力」の項目では、男子71.0%、女子75.5%が答え、男女ともに高い割合を占めた。「絶対男性の特性」や「絶対女性の特性」とみなすものは、どの項目においても少なかった。

これに対して、「まわりの環境に合わせる力」で最も多いのは「男女同じ」であるが、その次に多いのは「どちらかといえば女性の特性」と答えたものであった。その割合は、男子が26.7%、

表1 男女の特性 人 (%)

		絶対男性	どちらかとい えば男性	同じ	どちらかとい えば女性	絶対女性	無回答	χ <sup>2</sup> 値
何事にも挑戦する気 持ち	男子	27(7.7)	63(17.9)	245(69.6)	13( 3.7)	1(0.3)	3(0.9)	40.91**
	女子	1(0.3)	24( 7.8)	260(85.0)	20( 6.5)	1(0.3)	0(0.0)	
まわりの環境に合わ せる力	男子	9(2.6)	25( 7.1)	212(60.2)	94(26.7)	8(2.3)	4(1.1)	11.03**
	女子	1(0.3)	14( 4.6)	176(57.5)	107(35.0)	8(2.6)	0(0.0)	
全体からものを考え る力	男子	15(4.3)	25( 7.1)	235(66.8)	64(18.2)	8(2.3)	5(1.4)	9.14
	女子	2(0.7)	19( 6.2)	215(70.3)	62(20.3)	8(2.6)	0(0.0)	
他人のために尽くす 力	男子	19(5.4)	23( 6.5)	236(67.0)	63(17.9)	6(1.7)	5(1.4)	20.24**
	女子	5(1.6)	10( 3.3)	192(62.7)	83(27.1)	13(4.2)	3(1.0)	
考え方や出来事を数 字や文字に表して処 理する力	男子	10(2.8)	30( 8.5)	231(65.5)	65(18.5)	12(3.4)	4(1.1)	4.62
	女子	5(1.6)	38(12.4)	193(63.1)	53(17.3)	15(4.9)	2(0.7)	
簡単な作業を続ける 力	男子	22(6.3)	46.(13.1)	196(55.7)	74(21.0)	11(3.1)	3(0.9)	27.70**
	女子	2(0.7)	28( 9.2)	158(51.6)	105(34.3)	12(3.9)	1(0.3)	
体や心の痛みをがま んする力	男子	62(17.6)	92(26.1)	154(43.8)	24( 6.8)	16(4.5)	4(1.1)	22.36**
	女子	23(7.5)	79(25.8)	147(48.0)	43(14.1)	11(3.6)	3(1.0)	
筋道を立てて考える 力	男子	13(3.7)	28(10.8)	250(71.0)	43(12.2)	4(1.1)	4(1.1)	6.64
	女子	3(1.0)	23( 7.5)	231(75.5)	40(13.1)	7(2.3)	2(0.7)	

\*\*…p<0.01 \*…p<0.05

女子が35.0%と比較的高いといえる。「全体からものを考える力」についても同様の傾向があり、「男女同じ」と答えたものが最も多いものの、その次は「どちらかといえば女性の方が優れている」とみなすものであり、男子18.2%、女子20.3%という割合で、男女ほぼ類似していた。

「他人のために尽くす力」では、男女とも「男女同じ」に次いで「どちらかといえば女性の特性」と見るものが、「どちらかといえば男性の特性」とするものよりも多かった。その割合は女子が27.1%、男子が17.9%で男女差が認められた。「考え方や出来事を数字や文字に表して処理する力」についても、「どちらかといえば男性の特性」と見るものよりも「どちらかといえば女性の特性」と見るものの方が多く、男子18.5%、女子は17.3%であった。「簡単な作業を続ける力」については、「どちらかといえば女性の特性」とみなすものが男子21.0%、女子34.3%であった。

以上のように男女の特性の捉え方に違いがあるか否かを明らかにするため、 $\chi^2$ 検定を行ったところ、「何事にも挑戦する気持ち」、「他人のために尽くす力」、「簡単な作業を続ける力」および「体と心の痛みをがまんする力」の4つの特性に1%水準で、「まわりの環境に合わせる力」では5%水準で有意差があった。

したがって、男女ともここで取り上げた特性を「男女同じ」とみなすものが最も多いという共通点があるものの、その次に占める割合からは、男子は忍耐力や積極性に関しては「男性の特性」として、女子は思考力や人のために尽くすといったことを「女性の特性」とみなす傾向にあるといえる。これは中学生が、男女にはそれぞれの特性があると認めるものであり、男女の特性の理解という面では、未だステレオタイプの捉え方が十分に払拭されてはいないことを示すものである。

## (2) 性別役割分業意識

男女平等を達成するための継続的な取り組みによって、成人においては固定的な捉え方が徐々に変革してきた<sup>9)</sup>。次世代を担う中学生はどのような捉え方をしているであろうか。このことを明らかにするため、「男は仕事、女は家庭」という考え方をどう受け止めているかについて回答を求めた。

表2より、男子で最も多いのは「どちらでもない」が45.7%であるのに対し、女子は「どちらかといえば反対」が33.3%であった。次に男子では「どちらかといえば反対」が18.8%、「反対」が14.5%で、これらを合わせて反対とするものは33.3%となった。女子についても同様にしてみると、2番目に多いのが「反対」27.8%であり、これに「どちらかといえば反対」とするものを合わせると61.1%になり、反対というものは男子の約2倍であった。「賛成」と「どちらかといえば賛成」を合わせて賛成というものは、女子が7.9%に過ぎないのに、男子は20.5%で、女子の2倍以上を占めた。

						人 (%)
	賛成	どちらかといえば賛成	どちらでもない	どちらかといえば反対	反対	$\chi^2$ 値
男子	22(6.3)	50(14.2)	161(45.7)	66(18.8)	51(14.5)	68.73**
女子	2(0.7)	22(7.2)	85(27.8)	102(33.3)	94(27.8)	
合計	24(3.6)	72(10.9)	246(37.4)	168(25.5)	145(22.0)	

\*\*… $p < 0.01$

このような男女間での違いを明らかにするため、 $\chi^2$ 検定を行ったところ、1%水準で有意差があった。したがって、中学生段階において男子は女子と比較して、役割分業を性によって固定的に捉える傾向が明白で、依然として伝統的な考え方をしているといえる。このような男女差の傾向は成人において顕著であり、大人の考え方や行動様式が中学生にとってモデルになっているといえる。

### (3) ジェンダー観

職業、育児、知的および家事能力、言葉使い、おしゃれなどの考え方に、社会的、心理的に形成された男女の違いに基づく差異があるかというジェンダー観を調査した結果が、表3である。

表3 ジェンダー観 (点)

	男子		女子		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
知的な能力は個人差よりも性差が大きい	3.18	0.95	3.35	0.80	2.50*
男子は女子よりもたくましい方がよい	2.02	1.00	1.86	0.91	2.12*
女子は男子より手先が器用だ	2.67	1.07	2.70	0.96	0.33
男子がおしゃれするのはおかしい	3.41	0.77	3.48	0.84	1.22
女子は乱暴な言葉使いをしてはいけない	2.87	1.00	3.06	0.95	2.49*
育児能力は男女ともに必要ではない	3.46	0.77	3.58	0.73	2.04**
職業には性別による、向きや不向きがある	2.06	1.05	2.28	0.96	2.74**
料理や裁縫が嫌いな女性では困る	2.61	1.00	2.81	0.94	2.64*
男女交際では男子がひっぱっていくべきだ	2.68	1.04	2.55	0.98	1.72
男子と女子では本質的に違う	2.37	1.02	2.32	1.05	0.65

\*\*…p<0.01 \*<0.05

ジェンダー観を示す10項目について、「そう思う」を1点、「どちらかといえばそう思う」2点、「どちらかといえばそう思わない」3点、「そう思わない」を4点とする4段階評定尺度によって得点化した。すなわち、これらの得点が高いほどジェンダー・フリーの傾向を示すものである。

得点の傾向から男女によるジェンダー観の特徴をみると、「男子がおしゃれをするのはおかしいと思う」、「育児能力は男女ともに必要ではない」という項目は、男女とも3.41~3.58と高得点であり、このような考え方には否定的であることがわかる。その次に否定的なのは、「知的な能力は個人差よりも性差が大きい」と「女子は乱暴な言葉使いをしてはいけない」であった。

これに対して、「男子は女子よりもたくましい方がよい」の項目では、男子が2.02、女子が1.86、「職業には性別による、向き不向きがある」は男子2.06、女子2.28であることから肯定的といえる。その他の項目については、肯定的、否定的のいずれでもない、いわば中立的といえるものであった。

男女間の違いを明らかにするため、t検定を行ったところ、「職業には性別による、向き不向きがある」と「料理や裁縫が嫌いな女性では困る」の2項目には1%水準で、「知的な能力は個人差よりも性差が大きい」、「男子は女子よりもたくましい方がよい」、「女子は乱暴な言葉使いをしてはいけない」と「育児能力は男女ともに必要ではない」の4項目において5%水準で有意差が認められた。

これら有意差のあった項目では、全てにおいて女子が男子と比較して得点が高く、女子の方が全般的にジェンダーにとらわれない傾向にあることが明らかになった。

### 3. 家庭の中の中学生

#### (1) 家庭の仕事の実践状況

表4は、中学生が家庭の仕事をどの程度実践しているかを調査したものである。この調査では、料理、掃除、洗たくなどの家庭の仕事について、「よくする」を3点、「時々する」を2点、「全くしない」を1点とした、3段階評定尺度によって得点化した。すなわち、得点が高いほど、家庭の仕事をよく実践していることを示すものである。

表4 家庭の仕事の実践状況 (点)

	男子		女子		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
食事のしたくや料理	1.60	0.60	1.99	0.59	8.37**
食事の片づけ	1.86	0.74	2.10	0.68	4.50**
部屋の掃除や整とん	2.23	0.68	2.30	0.59	1.43
ふる場の掃除	1.59	0.69	1.62	0.68	0.67
洗たく	1.29	0.53	1.68	0.69	7.94**
買い物	1.60	0.68	1.79	0.84	3.12**
ボタン付け・ほころび直し	1.20	0.49	1.61	0.67	8.79**
ごみを出す	1.50	0.67	1.35	0.61	2.95**

\*\* . . . p<0.01

全体的に見ると、「ごみを出す」を除く全ての項目において、女子は男子より得点が高く、家庭の仕事をよくしているといえる。男子では、「部屋の掃除や整とん」が2.23と全項目中で最も高得点であった。次に「食事の片付け」が1.86、「食事のしたくや料理」と「買い物」が1.60、「ふる場の掃除」が1.59と続いた。女子についても最も高得点なのは、「部屋の掃除や整とん」で2.30、続いて「食事の片付け」2.10、「食事のしたくや料理」1.99、「買い物」1.79の順であった。このように得点そのものは異なるものの、男女とも自分のこととして個人的にやりやすい仕事は実践する傾向にあるが、家庭の仕事としてまとめてすることを求められるのは、自分ではあまりしないという共通点が認められた。

これら家庭の仕事の実践状況に男女で違いがあるか否かを明らかにするため、t検定を行ったところ、「食事のしたくや料理」、「食事の片付け」、「洗たく」、「買い物」、「ボタン付け・ほころび直し」、「ごみを出す」の6項目において、1%水準で有意差があった。

したがって、男子と女子では、どんな仕事をよく実践しているかには共通点があったものの、実践する頻度には男女差が認められ、女子の方が全体的に見て家庭の仕事をよく実践しているという点で差異のあることが明らかになった。

#### (2) 勉強と家庭の仕事のバランス

表5は、勉強と家庭の仕事のバランスの取り方について、生徒から見て家族がどう考えていると思うかを尋ねた結果である。

家族は「たとえ受験期であっても身の回りのことぐらいはするべきだ」と考えていると答えたものが、男子46.9%、女子52.0%と最も多かった。次が「わからない」と答えたものである。その割合は、男子33.5%、女子31.0%であった。「勉強さえしていれば家庭の仕事は分担しなくてもよい」と答えたものは男子9.4%であったが、女子ではわずか2.3%に過ぎなかった。女子の場合には逆に「受験期に関係なく、決められている家庭の仕事を実践するのが当然だ」と答えたも

のが13.1%であるのに対して、男子は9.1%であった。

勉強と家庭の仕事のバランスについて、家族の考え方の違いを明らかにするため $\chi^2$ 検定を行った。その結果、1%水準で有意差が認められた。したがって家族は、子どもの性によって勉強と家庭の仕事のバランスの取り方についての考え方に違いのあることが理解できた。女子は男子より、家族から家庭の仕事を実践することを強く求められる傾向にあるといえる。

表5 勉強と家庭の仕事についての家族の考え方 人 (%)

	1	2	3	4	$\chi^2$ 値
男子	33(9.4)	165(46.9)	32( 9.1)	118(33.5)	17.07**
女子	7(2.3)	159(52.0)	40(13.1)	95(31.0)	
合計	40(6.1)	324(49.2)	72(10.9)	213(32.4)	

\* \* \* \* \* p < 0.01

- 1 「勉強さえしていれば、家庭の仕事はいっさい手伝わなくてもよい」
- 2 「たとえ受験期であっても、自分の身の回りのことぐらいはするべきだ」
- 3 「受験期に関係なく、決められている家庭の仕事は分担するのが当然だ」
- 4 「わからない」

次に、このような家族の考え方は、子どもである中学生の家庭の仕事の実践状況に影響を及ぼすと考えられるので、得点化の結果を用いて両者の関係を調べることにした。

男女別に家庭の仕事の実践状況について、得点の高い者から25%を家庭の仕事への積極的参加群、得点の低い者から25%を消極的参加群として、両群間に家族の考え方の影響があるかどうかを比較検討した。結果を表6に示した。

表6 家庭の仕事の実践状況と家族の考え方 人 (%)

男子	1	2	3	4	$\chi^2$ 値
積極的群	9(10.2)	42(47.7)	15(17.1)	21(23.9)	12.33**
消極的群	7( 8.0)	37(42.0)	4( 4.6)	39(44.3)	

女子	1	2	3	4	$\chi^2$ 値
積極的群	0( 0)	41(54.0)	21(27.6)	12(15.8)	22.16**
消極的群	2(2.6)	37(48.7)	4( 5.3)	31(40.8)	

\* \* \* \* \* p < 0.01

- 1 「勉強さえしていれば、家庭の仕事はいっさい手伝わなくてもよい」
- 2 「たとえ受験期であっても、自分の身の回りのことぐらいはするべきだ」
- 3 「受験期に関係なく、決められている家庭の仕事は分担するのが当然だ」
- 4 「わからない」

男子の積極的参加群の家族は、「たとえ受験期であっても、身の回りのことぐらいはするべきだ」が47.7%、「受験期に関係なく、決められている家庭の仕事は実践するのが当然だ」17.1%のように、消極的参加群に比べて、受験期であっても家庭の仕事をするのが当然であると考えているものが多かった。これに対し、消極的参加群は家族がどのように考えているか「わからない」と曖昧なものが44.3%を占めて顕著であった。その次が「たとえ受験期であっても自分の身の回りのことぐらいはするべきだ」42.0%と考えているものというように、両群間で差異が見られた。

女子の家族についても男子とほぼ同様の傾向が認められた。両群間の家族の考え方に違いがあ



るかどうかについて  $\chi^2$  検定を行ったところ、男女とも 1%水準で有意差があった。したがって、家族の考え方は、子どもである中学生の家庭の仕事の実践行動に大きな影響を及ぼしていることが明確になった。

#### 4. 親の生活

##### (1) 両親の家庭の仕事の実践状況

「子どもは親の鏡」といわれるように、中学生にとって最も身近な大人である親は、彼らの行動や考え方などにモデルとして影響を与えるものである。ここでは、親の生活実態を明らかにし、中学生の行動や意識との関わりを検討した。

まず、生徒からみた親の家庭の仕事の分担状況を父親と母親がどのように分担しているかの観点から調査し、その結果を表7に示した。

表7 子どもからみた親の家庭の仕事の分担状況  
人 (%)

	1	2	3	4
男子	45(12.8)	64(18.2)	188(53.4)	33( 9.4)
女子	31(10.1)	47(15.4)	174(56.9)	34(11.1)
合計	76(11.6)	111(16.9)	362(55.0)	67(10.2)

- 1 「父親が働き、母親は家庭の仕事に専念している」
- 2 「父親が主に働き、母親は家庭の仕事に差し支えない程度に働いている」
- 3 「父親と母親は同じように働き、家庭の仕事は母親がしている」
- 4 「父親と母親は同じように働き、家庭の仕事は分担してやっている」

「母親も父親と同じように働くが、家のことは母親がしている」と答えたものが55.0%と最も多く、次いで「父親が主に働き、母親は家庭の仕事にさしつかえない程度に働いている」が16.9%であった。このような働き方をしている母親は程度の差こそあれ、家庭の仕事と職業との二重役割を果たしていることになる。これに対し、「父親が働き、母親は家庭の仕事に専念している」という伝統型や「父親と母親が働き、家庭の仕事は分担してやっている」の共業型の役割分担にあるものは、ともに約10%に過ぎなかった。

母親の場合、家庭と職業という二重役割をするものが7割を超えるということは、今日の家庭ではこれまでいわれてきた「男は仕事、女は家庭」ではなく、「男は仕事、女は仕事も家庭も」という役割関係が一般的であることを示している。この新しい役割関係の中で、家庭の仕事は依然として母親の分担という構図は、ジェンダー観の再生産を確実に行うものである。それだけでなく、母親には家庭と職業という二重の役割分担から、加重負担が生じることにもなる。本調査対象者の母親は1.(3) 母親の就労状況の項で述べた通り、「フルタイム」や「パートタイム」で働いているものが82.3%を占め、全国平均を大幅に超えていた。女性が働き続けるという傾向は今後益々強まることが予測されるので、このような両親の役割行動は、子どもに考え方や行動のモデルとしてより一層の影響を与えるものとなる。

##### (2) 家庭の仕事の実践への期待

ここでは、家族の子どもに対する家庭の仕事の実践への期待を子どもの側から調査した。

最も多いのが「時々言われる」というもので、男子52.8%、女子61.8%であった。次に男子では「言われたい」というものであり、31.5%であった。これに対して女子は、「いつも言われる」

と「言われぬ」が19.0%と同数であった。男子の「言われぬ」というものには、約1.5倍の開きがあった。「いつも言われる」と答えたものは、男子は13.6%、女子19.0%に過ぎなかった。

このような男女間での差異を明らかにするため、 $\chi^2$ 検定を行ったところ1%水準で有意差が認められた。したがって、家族は男子よりも女子の方に実践への期待度が高いという点で大きく異なることが明らかとなった。

表8 親による家庭の仕事の実践への期待 人 (%)

	いつも言われる	時々言われる	言われぬ	$\chi^2$ 値
男子	48 (13.6)	186 (52.8)	111 (31.5)	15.18**
女子	58 (19.0)	189 (61.8)	58 (19.0)	
合計	106 (16.1)	375 (57.0)	169 (25.7)	

\*\*... $p < 0.01$

さらに、家庭の仕事を実践するように「いつも言われる」と「時々言われる」と回答したものについて、誰から言われるかを尋ねた。結果の図表による表示は省略した。

男女とも最も言われるのは「母親」であり、男子66.2%、女子67.6%と過半数を占めた。同じ親でも「父親」と答えたのは、男子が18.8%、女子が6.1%に過ぎなかった。同様の傾向は「祖母」と答えたものに見られ、男子が「祖母」から言われるのは僅か5.6%であるのに、女子では12.6%と約2倍であり、割合はそう多くないものの伝統的な考え方からか、祖母の場合には女子への役割期待が高かった。その他、兄弟姉妹に言われたものは極めて少なかった。したがって、「母親」を除いて、家族は同性の子どもにしつけをし、そのしつけは伝統的でステレオタイプの傾向がみられることが理解できた。

### (3) 家族からの性役割の期待

種々の調査によって、日本では親は子どもに対して、「男は男らしく、女は女らしく育てるのがよい」と考える向きが強いことが明らかにされている。親は中学生に対してはどう捉えているのかを明らかにするため、家族から「男(女)らしくしなさい」と言われるかどうかを尋ねた。

表9 家族からの性役割期待 人 (%)

	いつも言われる	時々言われる	言われぬ	$\chi^2$ 値
男子	6 (1.7)	60 (17.0)	277 (78.7)	99.46**
女子	30 (9.8)	143 (46.7)	132 (43.1)	
合計	36 (5.5)	203 (30.9)	409 (62.2)	

\*\*... $p < 0.01$

男子は、約8割が「言われぬ」と答え、最も多くを占めた。これに対して、女子は「言われぬ」というものよりも「時々言われる」と答えたものが半数近くを占めて最も多かった。「時々言われる」という男子は17.0%であるので、これと比較すると女子では極めて多いといえる。「いつも言われる」男子は1.7%に過ぎないのに、女子では同じ回答が9.8%であり、割合はそう多いとはいえないが、男女差は顕著であった。

したがって、 $\chi^2$ 検定によって男女間に1%水準で有意差があり、男子と女子では家族による性役割の期待度に大きな差異があるといえる。このことは、未だに家庭はジェンダーの再生産の場であることを明確に示すものである。

では、「男（女）らしくしなさい」と誰に言われるかを求めた。その結果の図表による表示は省いた。男女とも最も言われるのが「母親」であり、男子は53.2%、女子は48.0%であった。次に言われるのは、男子は「父親」で18.2%、女子は「祖母」が19.1%であり、家庭の仕事の実践を期待するものとはほぼ同様の傾向であった。その他、この役割期待には男子の10.6%のものが祖母から、また女子の15.6%のものが「父親」から言われていた。加えて、男子の9.1%のものは「姉妹」から言われており、「男（女）らしくしなさい」については、家族の種々の構成員からの期待が極めて高いといえる。

次に、家族から「男らしく、女らしくしなさい」と言われた時、どの様に感じるかについて尋ねた。これについても図表による表示は、省いた。

男子は、「少し嫌だと思う」「何とも思わない」「嫌だと思う」という順に多いものの、それほど大きな差異はなかった。「少し嫌だと思う」と「嫌だと思う」を合わせると66.7%になった。他方、女子は「嫌だと思う」が57.8%と過半数を占め、これに「少し嫌だと思う」を合わせると79.8%となり、 $\chi^2$ 検定によって1%水準の有意差が認められた。この様に男女差はあるものの、「男（女）らしくしなさい」と言われることには、「嫌だ」という抵抗感を持つものが多いといえる。

## 5、学校の中の男女平等

### (1) 性による不平等な体験

学校教育においては、家庭科の女子のみ必修に代表されるように、特性教育論が支配的であった。今日、一般的に学校は家庭や職場などの生活領域や法律などに比較して「男女平等の場」であるとの理解が最も高いものの、決して十分な数字とはいえない。一方、島根県の中学校教員を対象とした調査では、性別による異なる扱いをしたという教員は極めて少ないという結果であった<sup>6)</sup>。では、彼らのもとで教育を受けた中学生は、教員の指導をどのように受け取っているのか明らかにした。

まず教員の指導によって生徒が、「不公平に扱われた」、「損をした」と感じたことがあるかどうかについて尋ねた。

男子は79.8%、女子83.7%と大部分のものはそのような扱いが「ない」と答え、「ある」というものは10%台であり少なかった。

どのようなことで「不公平に扱われた」あるいは「損をした」と感じたのかを、自由記述で求めた。男子で最も多いのは、「先生の態度」が26.7%、「内容は忘れたがとにかくある」23.3%、「持久走の距離」15.0%、「力仕事」15.0%という順位であった。女子については、「内容は忘れたがとにかくある」が28.6%で最も多く、次いで「先生の態度」19.1%、「座り方」9.5%であった。このように生徒から見ると、教員は男らしさや女らしさを求めるステレオタイプの指導を行ってきたことが伺えた。

教員が男女で異なる扱いをしていないとしても、生徒から見ても、性の違いで不公平や損をしたというように感じられる具体的な指導場面があったということは、学校では男女の特性について依然として、ステレオタイプの見方や捉え方をしており、それが具体的な指導場面では表れてしまうということである。このように学校文化には、無意識的にジェンダーの再生産が行われているということは、むしろ問題の根が深いといえる。

## (2) 学校での性役割の期待

学校で「男(女)らしくしなさい、男(女)のくせに」と言われたことがあるかについて尋ねたところ、結果は表10のようであった。

「言われない」と答えたものが男子88.4%、女子71.9%と最も多いものの、男子の方が女子よりもかなり上回っていた。「時々言われる」については、男子が8.0%に対して、女子では25.8%と約3倍を占め、男女差が顕著であった。「いつも言われる」については極めてわずかであり、生徒の調査から見限り、中学校では固定的な性役割行動をそれほど求めていないといえる。ただ、男女間には $\chi^2$ 検定によって1%水準で有意差があり、男女を比較すると、女子の方に性役割期待が高いといえる。

表10 学校での性役割期待

	人 (%)			$\chi^2$ 値
	いつも言われる	時々言われる	言われない	
男子	3 (0.9)	28 (8.0)	311 (88.4)	37.64**
女子	2 (0.7)	79 (25.8)	220 (71.9)	
合計	5 (0.8)	107 (16.3)	531 (80.7)	

\*\*… $p < 0.01$

では、誰に言われるのかを明らかにするため、「いつも言われる」と「時々言われる」と答えたものを対象にして尋ねた。結果の図表は、省いた。

男子は「男の先生」が48.4%、「異性の友達」29.0%、「同性の友達」16.1%というように男子教員と友達にほぼ二分された。女子については「男の先生」29.6%、「同性の友達」27.2%、「女の先生」23.5%というように、男女教員から言われる方が多かったということである。しかも、教員では男子教員の方がより一層強い性役割期待をし、それは男子の方により顕著であることが理解できた。

家庭では母親が男女に対してともに強い影響を及ぼしていたが、学校ではむしろ男子教員が性役割期待のキーパーソンとなっており、対照的であるといえる。

さらに、生徒に学校で「男(女)らしくしなさい、男(女)のくせに」と言われた時にどんな気持ちであるかを尋ねた。

男子は「少し嫌である」が35.5%と最も多いものの、「何とも思わない」32.3%と「嫌である」29.0%と大差ない値で、判断が三つに分かれた。これに対して、女子では「何とも思わない」が48.1%と約半数を占めて最も多く、「嫌である」28.4%、「少し嫌である」23.5%の順であった。男女で割合が異なるものの、「少し嫌である」と「嫌である」を合わせて嫌であるというものが過半数を超えたということは、生徒の心情を察して指導することが強く求められているといえる。

## 5、ジェンダー観形成に及ぼす要因

中学生のジェンダー観について分析を行い、影響を与えられると思われる要因について各項目で比較・分析を行った。さらに、それらの要因の中で、強い影響を持つのはどれかについて明らかにすることを試みた。

要因として取り上げた項目は、性別、きょうだいの構成、祖父母との同居経験、母親の就労状況、勉強と家庭の仕事についての家族の考え方、親の家庭の仕事の分担状況、親による家庭の仕事の実践への期待、家庭からの性役割期待および学校での性役割期待などであった。これらを数量化I類によって分析し、ジェンダー観の形成に影響を与える項目を特定した。数量化I類とは、

質的な要因に関する情報に基づいて、量的に測定された外的基準の値を説明するための方法である<sup>10)</sup>。カテゴリースコアがマイナスを示しているものは、ジェンダー観の形成を促進する条件であり、プラスを示しているものは、抑制し、フェミニスト的意識を高める条件となる。

カテゴリースコアの範囲（最大値と最小値の差）を示すレンジによって、各項目のジェンダー観形成に対する男子への影響力を比較すると、「学校での性役割の期待度」が8.151と最も大きいレンジを示し、他の項目と比較して極めて高かった。「きょうだいの構成」がこれに次いで高いレンジを示し、以下「勉強と家庭の仕事についての家族の考え方」、「母親の就労状況」、「親の家庭の仕事の分担状況」、「家庭の仕事への実践への期待」、「祖父母との同居経験」及び「家庭での性役割の期待」の順であった。

一方、表は省略したが女子についてみると、影響力が最も大きいのは男子と同様、「学校での性役割期待」であった。続いて「母親の就労状況」、「親の家庭の仕事の分担状況」、「勉強と家事についての考え方」が高いレンジで続いた。家庭でのしつけに該当する「家庭の仕事の実践への期待」と「家族の性役割の期待度」については、レンジが低くジェンダー観形成に与える影響は、そう大きくないものと考えられる。

このように男女とも最も影響を与えているのが、学校での性役割期待という学校教育に関わる

表11 ジェンダー観形成要因（男子）

項目	カテゴリー	カテゴリースコア	レンジ	影響順位
きょうだい構成	同性のみ	0.463	2.407	2位
	男女混合	-0.441		
	一人っ子	1.966		
祖父母との同居経験	現在同居	0.234	0.853	7位
	以前同居	-0.620		
	同居経験なし	-0.447		
母親の就労状況	フルタイム	-0.560	1.849	4位
	パートタイム	1.289		
	自営業	0.042		
	専業主婦	0.728		
勉強と仕事についての家族の考え方	勉強をしていれば手伝いはしなくてよい	1.334	2.143	3位
	自分のことは自分ですべき	0.443		
	分担している家庭の仕事はすべき	-0.809		
親の家庭の仕事の分担状況	父仕事、母家庭の仕事	-1.331	1.700	5位
	主に父仕事、母家庭の仕事	-0.159		
	父母とも仕事、母家庭の仕事	0.369		
	父母とも仕事、家庭仕事は分担	-0.026		
家庭の仕事の実践への期待	いつも言われる	-1.115	1.361	6位
	時々言われる	0.246		
	言われない	0.048		
家庭での性役割の期待	いつも言われる	-0.057	0.826	8位
	時々言われる	0.672		
	言われない	-0.153		
学校での性役割の期待	いつも言われる	7.154	8.151	1位
	時々言われる	-0.997		
	言われない	0.040		

要因であることが明らかになった。

現在、学校においては隠れたカリキュラムの存在がジェンダー観形成に影響を与えていることが明らかにされつつあり、学校の環境をこれまで以上にジェンダー・フリーに変えていく必要があると思われる。そのためには、まず教員がジェンダーにとらわれない指導を行うことが望まれる。いずれにしても教員が中学生のジェンダー観形成に大きな影響を及ぼしているということは、学校教育の重要性を示唆するものである。

#### IV. 要約

男女平等を達成し、男女共同参画社会の推進を図ることは、21世紀における最重要課題の一つである。この課題への達成には、学校段階の家庭科のみならず、生涯教育としてジェンダー・フリーに基づく家政教育に期待されるところが大である。本研究では、中学生に焦点を当て、ジェンダー観がどのような要因によって形成されるのかを、アンケート調査によって明らかにし、ジェンダー・フリー教育実践の手がかりを得ることを目的とした。

数量化Ⅰ類による分析の結果、中学生男子は、他の要因に比して学校での性役割期待が極めて高く、次いできょうだいの構成、勉強と家庭の仕事についての家族の考え方となった。一方、女子でも男子と同様に、学校での性役割期待が最も高く、続いて母親の就労状況、親の家庭の仕事の分担状況、勉強と家庭の仕事の分担状況となり、性役割期待という学校での要因が男女とも大きく関わっていることが明らかとなった。ジェンダー・フリーの達成にも学校教育が重要な役割を担っていることが明確になった。

#### 参考文献

- 1) United Nations *Report of the World Conference of the International Women's Year*, pp. 9~41
- 2) 上野千鶴子「差異の政治学」『岩波講座現代社会学第11巻ジェンダーの社会学』、上野千鶴子他編、岩波書店、1996年、p. 1
- 3) マイラ&デイヴィット・サドガー 『「女の子」は学校でつくられる』、株式会社時事通信社、1997年、pp. 11~17
- 4) 生涯教育審議会「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」、1992年
- 5) 文部省『高等学校学習指導要領解説 家庭編』、開隆堂出版、2000年、p. 5
- 6) 多々納道子、田原泰子「中学校教員のジェンダー観の形成要因」、島根大学教育学部附属教育臨床総合研究センター紀要第1号、2002年、pp. 101~115
- 7) 国勢調査 2000年
- 8) 東京女性財団『若い世代の教師のために—あなたのクラスはジェンダー・フリー?』、1995年
- 9) 総理府『女性の現状と施策』、大蔵省印刷局、1997年、p. 111
- 10) 田中豊、垂水共之、脇本和昌、パソコン統計解析ハンドブックⅡ多変量解析編』、共立出版、1984年、p. 258